

動画を用いた仮想接触が身体障がい者への偏見に与える影響

藤枝 裕也

問題 先行研究において、外集団との肯定的なコミュニケーションを想像するという仮想接触が、身体障害者への顕在的偏見を低減させるということが知られている。ただ、従来の仮想接触には、①外集団への知識を供給できない、②想像内容の質を担保できない、という二つの問題が存在する。そこで、本研究では、動画を用いた仮想接触という新たな仮想接触の効果を検証することを主な目的とした。また、障害者への偏見は、社会的望ましさの影響から顕在的指標のみでは捉えきれないため、潜在的態度の測定も併せて行い、下記 4 つの仮説—仮説 1: 従来の仮想接触は、身体障害者に対する顕在的偏見を低減させる、仮説 2: 動画を用いた仮想接触は、従来の仮想接触よりも身体障害者に対する顕在的偏見を低減させる、仮説 3: 従来の仮想接触は、身体障害者に対する潜在的偏見を低減させる、仮説 4: 動画を用いた仮想接触は、従来の仮想接触よりも身体障害者に対する潜在的偏見を低減させる、を立てた。

方法 参加者を 3 つの条件(統制条件・従来の仮想接触条件・動画を用いた仮想接触条件)に割り振り、実験室実験を行った。実験は 2 回に分けて行い、1 回目は身体障害者に対する態度の測定のみを、2 回目は 1 週間後に仮想接触と身体障害者に対する態度の測定を行った。顕在的態度の測定には ADTP 日本語版(村井, 1999)を用い、潜在的態度の測定には IAT (Greenwald et al., 1998)を用いた。

結果 仮想接触条件と測定タイミングを独立変数、身体障害者に対する顕在的態度と潜在的態度を従属変数とし、混合 2 要因分散分析をそれぞれの従属変数に対して行った。その結果、仮説はすべて支持されず、従来の仮想接触も、動画を用いた仮想接触も、身体障害者に対する顕在的・潜在的偏見に影響しないということが示された。

考察 従来の仮想接触が身体障害者への偏見を低減させないのは、先行研究に反する結果であった。ただ、本実験のサンプルサイズが先行研究よりかなり小さかったため、さらなる検証が必要である。動画を用いた仮想接触が、身体障害者に対する偏見を低減させなかった主な原因は、コミュニケーションのイメージが受動的になってしまったからだと考えられる。偏見の低減には、従来の仮想接触の方が、イメージトレーニングにより接触に対する自己肯定感を高められるため、効果的である可能性がある。今後の研究では、仮想接触時間や「障害者」表記の違いが仮想接触効果に影響するかを検討していくのが望ましい。(社会心理学)